



西研／森下育彦
Nishi Ken
Morishita Ikuhiko

「考える」ための 小論文

CHIKUMA SHINSHO

……論文は試験のために生まれたものではなく、もともとは自発的に書かれるものだ。……自分の考えの核心をうまく伝える言葉を探し、他者とともに納得できる考えをつくりあげていこうとすること、これが論文を書くことのいちばん底にある夢であり、ユートピアなのだ。

ちくま新書

110



ちくま新書

110

「考える」ための小論文

一九九七年五月二〇日 第一刷発行

著 者 西 研（にし・けん）

森下育彦（もりした・いくひこ）

発 行 者 柏原成光

発 行 所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 郵便番号二二
振替〇〇二六〇―八四二二三

案 内 〇四八―六五二―〇〇五三（サービスセンター）

装 幀 者 間村俊一

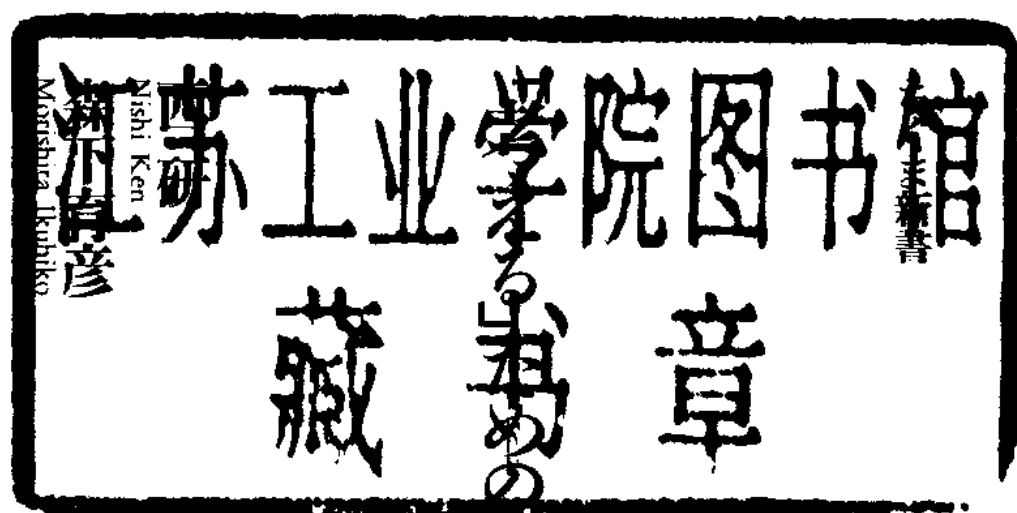
印刷・製本 三松堂印刷株式会社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© NISHI Ken, MORISHITA Ikuhiko 1997

Printed in Japan

ISBN4-480-05710-2 C0281



蔵書
章
蔵
庫
の
小
論
文

「考える」ための小論文「目次」

まえがき

007

第二章 論文ってどういうもの？（西研）

009

1 何のために論文は書かれるのか

010

自分をつかむために書く／他人に伝えるために書く

2 なぜ「論文入試」があるのか

014

思考力Ⅱ 疑う力・広く生き生きした関心・自問自答の能力／表現力Ⅱ わかりやすさ

3 論文は「考え」を伝える

021

考えを伝える文と感情を伝える文／考えと感情はどう違う／感情や感覚のなかには考えが潜在している

4 論文の「かたち」について

025

「主題」——考えがそれについて展開されるもの／「問い」——問いに対して答える／論文の構造——論文の三要素とその構成

5 論文の「なかみ」について 032

究極の主題？／あらゆる主題は人間の生から生まれる／〈個〉と〈社会〉——領域でもあるし、視点でもある／歴史的視点と歴史貫通的視点／四つの問い方

コラム●アイデンティティ

039

コラム●死を想え？

041

第二章 じょうずに「考える」ために (西研) 043

1 独自性とは〈喚起力〉と〈解明力〉のことである 044

独自性は「奇抜さ」ではない／独自性はおのずと出てくるもの／喚起力と解明力を具体的に訓練するために

2 感覚を見つめて的確な言葉をつくる 050

3 〈自分への問い〉を通じて〈一般的な問い〉に答える 059

「自分の感動」から「感動そのもの」を問う／自由とは何か／〈本質観取〉——具体的体験から「本質（ ）とは何か」を取り出す

4 主題を〈問題状況〉に着地させる 066

〈問題状況〉から主題と問いが生まれる／〈問題状況〉を設定して論じる

コラム●豊かさ

073

コラム●他者

075

第三章 「読み」と「発想・構成」【原理篇】（森下育彦） 077

1 読み——「読む」は他者との出会いであること 078

設問は何のためにあるのか／出題者との出会い——題意の把握／課題文筆者との出会い／読解のカンどころ／触発されるとはどういうことか／言葉は目の邪魔になる

2 発想・構成 095

小論文に「正解」はない、だから書き方にも「正解」はない／発想の基本——主題の設定とイイタイコト／「言えること」ではなくイイタイコトから出発する／「自分にひきつける」とはどういうことか／「関心を持つ」ことの意味／「感じ」から「考える」へ、そしてイイタイコトへと言葉は深化する／賛成か反対か／ふたたび、言葉は目の邪魔になる／具体例はなぜ有効か／具体例は自分のなかから出てくる／言葉はどのように紡がれるのか／問いから抽象へ

コラム①近代 127 コラム②国境を越える動き 129

第四章 「読み」と「発想・構成」【実践篇】 131

1 犬は自殺をするものか（森下） 132

筆者のプロファイル／読みと発想／犬と自殺／言葉、表現、思想／言葉と名前／解答例にそくして

2 文化相対主義 (西) 153

筆者のプロファイル／西欧中心主義批判・文化人類学・文化相対主義／要約文は「縮小版」ではない／どうやったらイイタイコトがわかるのか——背景の事情と問いをつかむ／大きく分けて論の流れをつかむ／題意を明確に把握する／具体的な場面(問題状況)を想定する／解答例 1／解答例 2

3 自由と制約 (西) 183

筆者のプロファイル／何が問われているのかを考える／読解——大きく分けながら論旨をつかむ／考えるべき問いは何か／社会契約の思想——ジョン・ロック／解答例 1／解答例 2

4 他者としての音楽 (森下) 203

筆者のプロファイル／「他者の声」／表現と社会／出会い／歪められる「他者」／発想——「出会い」はあるか／解答例にそくして

コラム●真理なんてどこにもない? 225 コラム●自然環境問題 227

あとがき 229

文系入試小論文の世界 230

出題形式のバリエーション 238

各章章扉のイラスト——栗林玲子

まえがき

論文に「正解」はない。書かれるべき正しい内容があらかじめ決まっているわけでもないし、構成法や作成手順が厳密に決まっているわけでもない。とうぜん「これさえ知れば論文はすぐにでも点が稼げる」というたぐいの秘密のテクニックなども存在しない。これが、この本の基本的な考え方である。

論文模試などで答案を見てみると、「作文と論文は違う」ということ——感想だけではだめで主張がなければ論文とはいえない——は広く常識となってきたが、この「論文に正解はない」ということは、まだ共有されているとはいえない。しかし、どこかに正解があるはずであってそこに近づくなくてはならない、という発想が、論文を書くという営みをひどくつまらない、やせたものにしていていると思う。

論文とは一人一人が考えていく作業そのものであり、また考えていくプロセスを他者に向けて提示することであって、どこかに模範があるのではない。そして、書くことの原動力となるのは、自分で発見したり納得したりすることの喜びと自由の感覚なのである。

私たちは予備校で小論文を教えているが、授業が始まった当初は「早くテクニックを教えてくれ」と思っている生徒も多い。しかし実際に問題をやっていくうちに、多くの生徒たちが考えることの面白さにめざめてくる。実際、さまざまな課題文を手がかりにしながら自分の生き方や社会の在り方についてあらためて考えてみることも、好奇心旺盛な若者たちにとって（さまざまな問題につきあたって悩んできた大人たちにとっても）、面白くないはずがないのだ。

大学入試小論文の問題には多方面からさまざまなテーマが出題され、また思考を刺激するのになかなかよい素材が含まれている。この本が狙いとしたのは、試験のための小手先のテクニックを教えることではなく、あくまでも、**入試問題を素材として思考と書き方を訓練すること**である。第一に、考えることの面白さと豊かさ、第二に、「一般論」にならないように考えを掘り進める技術、そして第三に、論文もまた「他者」に対するコミュニケーションであること、そういうことを伝えようとして私たちはこの本を書いた。

その意味で、この本は受験生のための参考書であると同時に、**広く考えて書きたい人——独自性ある文章をめざしたい人のための本でもあること**を意図している。この目論見が成功しているかどうか、読者からのご批判やご意見をうかがいたいと思う。

第二章

論文ってどういうもの？



この章では、**論文とはどういうものか**ということについて、その基本的なイメージを伝えたい。「なんとなく論文ってこわい」と思っている人も、相手の正体がわかってくればこわくなくなるはずだ。「早く技術を教えてよ」と思っている人には、あらゆる技術は論文とは何かを知るところから生まれる、と言いたい。具体的な技術論は二章以降にゆだねて、まずはいちばん根っこの話から始めよう。

1 何のために論文は書かれるのか

読者の多くが、論文試験の対策のためにこの本を手にとっていると思う。けれども、論文は試験のために生まれたものではなく、もともと自発的に書かれるものだ。その目的は大きくいって二つ。一つには「自分」をつかむため、もう一つは「他者」に考えを伝えるために、人は論文を書こうとするのである。

↑自分をつかむために書く

たとえば、イイタイコトが自分のなかにもややもやしているのだが、どうもじょうずに言

葉にできない、ということがある。自分でもよくつかめないし、他人にもうまく伝えられなくてイライラする。そういうときに、日記やノートに文字にして書きつけてみると、だんだんはつきりしてくることがある。

論文が書かれるのも、一つにはそのためだ。つまり**自分のなかのモヤモヤしたことを明確にするために書かれるのである**。あいまいだったり錯綜したりしている考えやイメージを書くことでハッキリさせ、自分のなかをスッキリさせたいから、書く。「論文」というとかめしいけれど、もともと、私たちが日記に言葉を書きつけるのとそれほど違わない。

ところで、そうやって日記に考えを書きつけていくと、「これってちよつと勝手な考えだなあ」とか「やっぱりこれでいいんだ」と思うことがある。つまり浮かんできた考えに違和感を覚えたり、深く納得したりし始めるのだ。こうしていつのまにか**考えを吟味・検討する自問自答の作業が始まる**。この自問自答をはつきりと意識して行なうなら、それがそのまま論文になるのである。

私たちはなぜ、そんなことをするのだろうか。それはおそらく、納得できない考えには従いたくない、自分は自分らしく生きたい、と思っっているからだ。他人から与えられたままではなくて（私たちのなかに浮かぶ考えの多くが他人の考えのコピーなのだ）、自分でちゃんと考えて納得したい。そのために、私たちは論文を書いて自問自答してみるのである。

↑他人に伝えるために書く

このように論文は、何よりも「自分の納得」のために書かれるものだ。しかしまた、論文は他人を説得する（他人を納得させる）ためにも、書かれるのである。

私たちは、自分の考えを他人にわかってもらいたい生き物である。だが、これが難しい。それが自分のなかで「大切なこと」であればあるだけ、うまく伝えるのは難しい。懸命に話してみても、イイタイコトの芯の部分がどうしてもわかってもらえないことがある。

また、私たちが何かを言うとき、親しい友人ならわかってくれるかもしれない。でも、そうでない人はなかなかわかってはくれない。親しい人でなくても考えをきちんと伝える方法はないか。

そういうとき、「書く」という方法がある。書くと、イイタイコトがだんだんまとまってくる。まとまってくれば、**きちんと筋道を通して**語ることができるようになる。つまり、「——というわけだから、私は……だと考える」といえるようになる。筋道を通すとは、意見を大声で叫ぶのではなく、自分がそう結論するにいたった理由をちゃんと順序だてて説明していくことだ。筋道を通して書いていくからこそ、「論」文というのである。

もちろん、筋道を通したからといって、相手がわかってくれるかどうかはわからない。

けれど、筋道を通して書くことができれば、相手に自分の考えていることをきちんと受けとめてもらう「可能性」は、はるかに広がる。相手が自分の結論やその理由をまっすぐに受けとめて、「ここは納得できるけれどあそこはどうなのだろう」というふうに意見を返してくるとき、ほんとうにうれしいものだ。

ところで、「わかってほしい」と思うとき、私たちはしばしば「この感情（辛さ）を受けとめてほしい」と思っている。「うんうん」とうなずいてくれる人を求めている。私たちが何かで傷ついているとき、心のケアを親しい人に求めるのはごく自然なことだ。そういうときには、自分が丸ごと受容されることが「わかってくれた」ことなのである。しかしそのようなコミュニケーションと、論文や討論のような「筋道を通すコミュニケーション」とは、一線を画さなくてはいけない。

論文を書くとき、自分の考えに全面的に賛成・賛同してもらうという意味での「丸ごとわかってもらう」ということは、必ずしも必要ではないし、また求めるべきでもないだろう。実際、相手から厳しい批判をもらったときでも、「まっすぐに受けとめてもらったうえで言葉だなあ」と思えるときには私たちはあまり傷つかないし、かえって感謝さえする。自分の考えの足らなかったところを気づかせ、助けてくれたのだから。

つまり論文を書く人がめざすのは、ただの賛同でも賞賛でもなくて、**読み手に自分の考**

え（結論及びそう考える理由）をまっすぐに受けとめてもらうことなのであり、そのことを通じて**考えを進めるための助力をもらえるようにすること**なのだ。そのために、書き手はいろいろと努力する。筋道がきちんとしているかを点検し、よけいな誤解を招かないよう配慮し、そして何よりも、自分の考えの「核心」をうまく伝える言葉を探すのである。

だから論文は自問自答のプロセスであるだけでなく、他者を巻きこんで互いに応答しあうプロセスでもあるのだ。そうやってともに納得できる**考えをつくりあげていこう**とすること、これが論文を書くことのいちばん底にある夢であり、ユートピアなのだといってもいいだろう。もちろん実際には、イイタイコトの核心を理解されずに筋違いな批判を受けることもあるけれど、書き手は表現を鍛えることでもってそれに対抗するのであり、それ以外の手段を持たないのである。

2 なぜ「論文入試」があるのか

さて、いま述べてきたように、論文とは基本的に「やりたいから」やるものである。イタイコトを自分のなかで明確につかみ、また他者に伝えたいから書くものである。なの

にこのところ、大学や短大の入試、また就職試験でも論文が課せられることが多くなった。入学・入社した後でも、レポートを書く機会が多い。なぜそうやってきたのだろうか。

試験を受ける側だけでなく試験を行なう側からいっても、論文試験ほど手間のかかるものはない。マーク・シートと違って一枚一枚読まなければならないし、評価について神経もつかうし、頭も眼もフル回転する（山ほどの論文を積み上げて、一日じゅう部屋に閉じこもって、ウンウン言いながらそれを「処理」している人の姿を想像してみてほしい。これはかなり悲惨である）。なのに、そこまで手間をかけて論文入試を行なうのは、やはり論文というかたちでなければ見るこのできない「力」があるためだ。

それは、つきつめると二点になる。一つは**自発的に考えを掘り進めていく力**であり、もう一つは**他者に対して表現する力**である。短くいえば、思考力と表現力。前に述べたように、論文とはそもそも、自問自答しつつ考えを掘り進め（思考し）、かつそれを他者に伝えようとする（表現する）ものだった。だからあたりまえなのだが、思考力と表現力の二つを見るには論文試験を行なうのがもつとも適しているわけである。実際、書かれた答案を読むとこの二つの力について相当な程度までわかってしまう。知識量や課題文の読解力も同時にわかるが、しかしそれは論文試験においては副次的である。テーマや設問もさまざまなが、それらも結局は思考力と表現力を見るために設定されていると考えていい。